八木健の滑稽俳句を分析する　（一）

～日野原重明氏と八木健氏～　　木藤隆雄

今から十年ほど前、百四歳になったばかりの日野原重明先生が子規博で講演された。その後、同じステージに八木健さんが登場し、俳句について語った。

その時、八木さんは、「俳句を難しく考えないで下さい。毎日書く日記のように、普段の生活を五七五にまとめればいいんですよ」と説明されていた。確かに、八木さんの句には、何気ない日常がさりげなく詠みこまれている。

頭の中を初期化してゐる日向ぼこ

懐の鯛焼き足を急がせる

アナログの風を生み出す団扇かな

着膨れか伊達の薄着か冬はじめ

日記だから、時代もさりげなく詠みこまれている。

ウィルスの世に北窓の半開き

私は、八木さんのほのぼのとした笑いが好きだ。

合格を祈願の絵馬に誤字脱字

心太背なを押されて仕方なく

中古の脚を新品のステテコに

掘炬燵触れたい足と嫌な足

くすっと笑った後、よくこんな点に気づいたなという驚きがあり、「そうそう、本当にそうだよね」という共感が沸き上がってくる。

俳人に吝嗇多し春惜しむ

ときどきは口すぼめたい鯉幟

蹴りに耐へ朝を向かえし夏蒲団

店頭の松茸色んな人が嗅ぎ

マフラーの巻きかた案外難しい

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

おなじみの「桐一葉落ちて天下の秋を知る」をもじった次のような句に接した際は、「笑い」と「感心」が私の心の中に同時に起こった。

威風堂々トップバッターの桐一葉

二枚目は値打ちが下がり桐一葉

桐一葉季語の自覚はなくて散る

八木さんは講演の終了間際、意外な行動に出た。ステージの端まで歩いて行き、講演中手にしていた自分の句集を、客席で八木さんの話を聴いていた日野原先生にプレゼントしたのだ。

「つぶやき」「写生」「擬人化」「言葉遊び」「見立ての面白さ」等が満載の八木俳句の世界は、日野原先生にとって大いに参考になったのではないだろうか。

実はこの頃、日野原先生は俳句に並々ならぬ情熱を注いでいた。日野原先生が俳句を始めたのは九十八歳の頃。医者として多くの患者に向き合っただけでなく、常に新しい事にチャレンジしていたのだ。

この日も、「私は今、ミュージカルに挑戦しているんです」と楽しそうに語っておられた。更には「数年先まで私のスケジュールは埋まっていますよ」とも語っておられた。

この講演は、私にとって忘れる事の出来ない思い出となった。子規博に行く為に乗ったタクシーの運転手さんが、「たった今、日野原先生を子規博までお送りしたんですよ」と話しかけてきた。という事は、私が座っているこの席に、あの日野原先生が少し前まで座っておられたのだ。何だかとても嬉しかった。

そして、私も日野原先生にあやかって、百歳を超えて長生き出来そうな気がした。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。